関西大學新報

発行所
関西大学新報社
大阪市大淀区長柄中通2
電話 (06) 2271
発行
編集人　村井 弘二
(一部 10円)

古本全般売買
天牛本店
道頓堀中座前
電話 (06) 二七五八・九番

学生不在の選挙続く

昭和42年度自治委員選挙

自治意識を拡散する選挙

現状を切開する主体的運動を

一般学生の不安高まる

昭和四十二年度学友会自治委員選挙は四月二十二日から、五月一日まで立候補者のビラ規制というなかで行われた。

選挙結果は、体育24(23)民青リ促9(3)文化4(12)応援団4(0)弁論1(3)建設1《（）内は去年》にみられるように、体育会系立候補者がその組織票を背景に圧倒的な強みを示し、自治委員の大半以上を占拠し、一方民青（クラス促進）の大幅な後退と、文化会の大きな後退など、学友会の勢力地図が変わってきた。

投票率は、全学部とも全体的に極めて低く、学生不在の選挙で無関心性を物語っていた。選挙用としての「学友会民主化」のことばが体育会から、普通の反対極にあるとみられがちな民青に至るまで、共通の標語として繰りかえされたが、少なくとも学友会活動団体の行動性を持ち、あらゆる面で何をなすべきかという問題意識を鮮明しえていなかった。そこでは、去年の闘えなかった「社会学部」の意味さえも語ることなく、終始した。そこで本年度自治委員選挙の実体を現実として行く中でわれわれ勤労学生の利益を如何に守り、生産的活動を行っていくのかという原初的問題を提起する。

過去の学友会執行部および自治委員の大半を占拠する体育会関係者の自閉意識が自己パートの経済的安定のため、予算分割そのものを盾によって押し切る現実以上のものでなく、自治委員の聴議の度合が所属パートの利害代表者以上何ものでもあり得ないということが繰り返されてきた。

厚生施設の貧困を表わすもの佐伯寮の値上げ問題が提起され、二部学生の経済的生活は正に危機にさらされたにもかかわらず、ボス交によって一般学生は無知、無能な状況におとしこめられていた。一去年闘えなかった「社会学部」にしても同じようにいえる。

ここに学友会活動の本質的限界を常に露呈する結果となって表われたとそれが大衆社会状況下のもとで、民主主義が空洞化していく状況を危機と捉えるとともに、学生自治は後退の道を確実に一歩一歩たどっていた。

自治委員選挙の実体は、単に学友会内部の混乱というだけの意味で終始できない程悪化していた。そして一般学生の前では形式的な民主主義のもとから、学内政治は学友会民主化が叫ばれたにすぎなかった。

こうした学友会の荒廃が必然的に全学友の学園生活そのものに陥を作ることになったことはいうまでもない。

過去の状況が、単にパート抗争を盾にされたにもかかわらず、それに反発を感じながら主体的に状況を切開していく運動が、とられずに過ごされてきた。

この情況下において民青（クラス促）は現在の学友会はパート抗争と位置付け批判し、大衆の基礎の一つとしてのクラス制の確立を「みんなでもっとたのしく」「交流をつくりましょう」に位置付けソフトボールなどのみの「学友会サービス機関」、学友会は「学友の身近な要求実現」として日共中央の大衆迎合的路線と、民青系「全学連」加盟を目的としての勢力拡大の、利益拡大を目指した学生運動の理論なき大衆運動に吸収できえたのであり、選挙戦を乗り切り伸長したといえる。

これはこれまでのパート、セクト的意識、学生大衆不在の学友会から脱しようとするあがきを反映していた。民青の主張するように自治委員会などの報告をしなかったことによるということとともに、勤労学生をとりまく学内・学外をとりまく非常に厳しい情勢下のもと、過去民主的活動家ともくされていた人が何らかのパートを基礎においていたため、パート利害と時間的制約を受けることが相まって積極的に学友会の実体をクラス設置まで討議し運動を展開していなかったという限界がそこにあった。

選挙投票の結果のみをみた時、体育会系自治委員が独占体制を強固にし、民青の伸長、文化会の大きな後退と現象したが民主的活動家が論理をもって分野を拡大するということは見いだせなかった。

したがって本来なら、大学の危機にあって、学生の自治を退究し去年の、闘えなかった社会学部の意味を解釈する立場から、落穂拾いなどの関大の経営主義とわれわれの生活活動、現実の「教員法」「大綱法」などが争点となるべきものは、鮮明化がなかなかしえず、いかに勤労学生の場を生産的に展開していくかということより、多数は、学生大衆ギマン的政策に終始した。それは社会選、政治悪と闘うと語られるだけのもの以上でなかった。

学生の意識に介入するための意識分析と、それを含みうる論理の展開と「選挙」の論理を関大二部の選挙においては徹底的に欠いているため、そこに関大二部の勤労学生の意識の向上と大衆運動の展開を、より一層困難な状況にさせている。

これらの諸情勢を具体的にいかに解決するかという方法論は、全体会系自治委員が独占体制を強固にし、民青の伸長、文化会の大きな後退と現象したが民主的活動家が論理をもって分野を拡大するということは見いだせなかった。

したがって本来なら、大学の危機にあって、学生の自治を退究し去年の、闘えなかった社会学部の意味を解釈する立場から、落穂拾いなどの関大の経営主義とわれわれの生活活動、現実の「教員法」「大綱法」などが争点となるべきものは、鮮明化がなかなかしえず、いかに勤労学生の場を生産的に展開していくかということより、多数は、学生大衆ギマン的政策に終始した。それは社会選、政治悪と闘うと語られるだけのもの以上でなかった。

学生の意識に介入するための意識分析と、それを含みうる論理の展開と「選挙」の論理を関大二部の選挙においては徹底的に欠いているため、そこに関大二部の勤労学生の意識の向上と大衆運動の展開を、より一層困難な状況にさせている。

学友会活動の本質的限界を常に露呈する結果となって表われたとそれが大衆社会状況下のもとで、民主主義が空洞化していく状況を危機と捉えるとともに、学生自治は後退の道を確実に一歩一歩たどっていた。

学友会活動の本質的限界を常に露呈する結果となって表われたとそれが大衆社会状況下のもとで、民主主義が空洞化していく状況を危機と捉えるとともに、学生自治は後退の道を確実に一歩一歩たどっていた。

ここに学友会活動の本質的限界を常に露呈する結果となって表われたとそれが大衆社会状況下のもとで、民主主義が空洞化していく状況を危機と捉えるとともに、学生自治は後退の道を確実に一歩一歩たどっていた。

昭和42年度自治委員選挙当選者一覧表

学部定員	氏名	得票	推せんパート	学部定員	氏名	得票	推せんパート
法1 三名	伊賀 興一	54	少促(民)	経1 三名	佐野 昇	40	体育
	山本 善隆	39	体育		芝田 英一	32	応援団
	伊藤 寛	29	体育		佐野 真吉	31	体育化
	(次)前田 春男	13	少促(民)		(次)吉村 秀樹	17	文化
法2 三名	兼田 新	48	体育	経2 三名	辻 康男	34	体育
	田中 俊夫	29	応援団		加藤 幸治	25	体育
	松下 義弘	28	少促(民)		喜多川 進悟	22	少促(民)
	(次)永田 徹	21	文化		(次)荻野 嘉香	16	文化
法3 三名	沢 利一	52	体育	経3 三名	吉田 稔	19	体育
	河田 瞭美	49	弁論		木下 宏一	19	体育
	斎藤 恒男	28	体育		大沢 美恵子	18	少促(民)
	(次)小林 忠一	26	文化		(次)満田 正一	7	文化
法4 四名	原 清三	28	少促(民)	経4 四名	阿藤 鎖郎	無投票当選	応援団
	高田 英明	21	文化		中島 秀華		体育
	小谷 重行	18	体育		井手 政勝		体育
	久保田 邦夫	11	体育		田村 功		文化
	(次)山本 祥二	7	体育				
文1 二名	岡本 圭一	46	体育	商1 二名	江村 正治	無投票当選	E.S.S.
	藤井 省三	25	少促(民)		前田 憲二		体育
	(次)平内 一行	12	建設				
文2 二名	松岡 文平	36	建設	商2 二名	泉谷 寛	40	体育
	西田 一成	23	体育		吉田 健次	29	少促(民)
	(次)浜本 鶴男	17	少促(民)		(次)細川 茂樹	8	体育
文3 二名	吉田 一美	21	少促(民)	商3 二名	若林 宣祐	24	体育
	浅田 弘	17	文化		井林 和義	24	体文
	(次)竹内 里蔵	13	体育		(次)佐々木義彦	14	文化
文4 二名	荻原 宏明	11	体育	商4 二名	横畠 正秀	15	体育
	浜崎 勝美	9	少促(民)		林田 嘉盛	9	応援団
	(次)橋本 正彦	7	文化		(次)段上 賢	7	文化
社1 二名	中屋純一郎	14	文化				
	吉田 昇	13	体育				
	(次)竹田 華雄	11	少促(民)				

論説

内部的腐蝕に抵抗を

ベトナム戦争反対に

アメリカ軍のハノイ爆撃の激化と、アメリカ支配階級の「勝利の展望」の自信の表明のもと国連、ソ連イギリス、北ベトナムの「和平」提唱が現実性のものとなく、虚偽であり国際情勢緊迫化は現在各国の自国中心のショナリズムの昂揚にみられる支配体制強化の方向をとっている。それは現実の政治・経済体制がなんらかの力によって突き崩れない限りベトナム戦争を頂点とした世界の矛盾の集中「危機」を増幅し戦争とも起因し、「和平」さえ無責任なものとしてそれに期待を寄せることもできず無力、諦観につながれているという情況である。「二十世紀最大の悲劇」ともいわれベトナムの大地に、殺戮、虐殺、破壊、焦土化し絶滅むり、戦なしの会議へ深まりゆく危機がわれわれのベトナム反戦を主体的に捉え、「平和」「和平への願い」を、ベトナム戦争

歴史と現実との断絶

学費値上げを頂点として諸矛盾が公中、噴火した点大、明大は、国家権力の大学への度重なる暴力的介入と、右翼と擬似左翼の暴力的介入により破壊された情況。関学における新設自治会撤回実現と関大における闘争なかった社会学部の情況。私立大学の大衆化状況において、全国的に私立大学において激しく顕在化している大学の危機の底流から、生活闘争、教育闘争、人間回復闘争、自治権闘争（学生）など形態を異にしながら現出している。そこには「大学の非大学化」「産学協同」に表現される社会の要請・支配に対して、自己確証を表現している大学の大衆化に対して、〝危機〟を感じながら大学の生存をかけた課題にとりくまなければ、解明することはむずかしく創造することの放棄であろう。本論はかかる情況において「討議の資料」あるいは「試論」である。

「大学の非大学」、過渡期の〝場〟を空洞

〝大学とは何なのか〟と問うときその行為の空虚さを、自己を感じながら問わざるをえないとき、返ってくる思想は拡散、分散している。この空洞の現状は各自のものであり〝場〟の喪失である。

大学は本質的に批判者であり変革者である。大学の目的とする研究と教育がもつ本質の必然的な結合である。それは支配的、社会的な常識、既制の秩序、価値の転倒であり、根底をつねとして批判、否定の〝場〟である。そこに大学の研究と教育の〝場〟がある。さらにこの〝場〟は絶えず変化するなかにあって自己確証を探索する「自己超克への強烈な力として、日常不断の思考や実践活動を展開していく原動力を生まれてくるところの〝場〟であり、この場の確立への「学問の自由」と「大学の自治」が不可欠であることはおのおのの読者がすでに承知し承認するところである。

しかし「学問の自由」と「大学の自治」を分断し拒絶した「東大見解」、あるいは関大協の「学生問題に関する所見」、〝学費〟を頂点において、私立大学の危機の現時点への下降の試をは問する。

日本近代化の課題として、体制の流動期であった明治初期においての私立大学は反権力・反国家を底民の大学の旗印に在野のインテリゲンチャ達の働きによって専門学校＝私立大学の創設の流れの火と化した潮流と、相反した位置に、薄弱資本国家の官僚養成の要請に答える実用的に位置付けられた国家支配の機関＝国立大学（帝国大学）があり、二潮流が鳴っていた。

日本近代化に在野のインテリゲンチャ達は、フランス革命以降、自由・平等に象徴化された近代国家の理念に理論的、実践的によりこれに基づく個人主義の人間を育てるための〝大学〟と方向を定め歴史・人間を真に解放する推進主体としての〝場〟と位置付けた。

自由主義的な思想（理念）に導びかれている大学＝大隈の早稲田大、福沢の慶応大、新島の同志社など＝、政府に対して自由な批判をところざすという立場で東京法学社（法政大）、明治法律学校（明治大）、関西法律学校（関西大）などの二つの性格の大学が創設されていた。

そこでは国家権力機関によって人類を真に解放しえるものではないとし、この〝場〟を侵害するものが現在国家権力といえども、これと対決していくべきを考えない〝場〟である。封建から近代への形成の混乱の過渡期にあって現出した私立大学の建学精神は、国家、社会、歴史の主体者の人間の進むべき道を示した先進的な思想であり、それは、天皇制絶対主義の国家の政治的独裁体制のもとには対決を保なべきされざるを得ない情勢にあった。それは全国至るところに勃発した中央の常備軍に対抗した民衆の抵抗・蜂起の激烈な闘いは、学・時間を異にしながら薩長国家の政治的独裁に抗して民衆の生活を擁護していこうとする底流であり、庶民の大学の旗印は、この歴史的過渡期に民衆の場にたち、民衆の場からの運動を象徴していた。

しかし天皇制国家主義体制の歴史にあって圧殺され、体制に順応し、これを維持するという方向をとり、大学の自治が確立されなかったということは周知のことである。建学精神は大体持続することがたてまえである。持続をたてまえとするとき、その質は転換すべきものであり、変化せずに堅固な形態をもって持続するものでもなく、また喪失をなおざりにするものでない。この歴史を検証することを意たりアメリカ占領による「上から」の民主主義体制を考古学を研究し、学問を徹底的にするには好きなだけではできないという。昭和十一年に学士院賞初受賞よりその成果が認められてきた。二十五年に関大に着任してから十七年間、多くの有能な学究の徒を育てた。その数日本の考古学界を指である。現在の最大の楽しみは考古学に情熱をもつその学究の徒たちが少しでも役に立っていることである。すでに関大の考古学の基礎が完成されたことは自他共に許すところだ。

悲は大きい。関大博物館構想もある。何しろ研究室にある資料は学界でも嗜好をあおらざるをえないものばかり。お酒もタバコも縁がなく趣味は発掘調査考古学以外のものは興味なしというからして生活そのものが考古学中心なのである。来年古希の七〇歳を迎えるとともに停年退職される。〝去る〟の感つよし。弟子たちが古希記念論文集を出版し祝の企画があるとのこと。

末永雅雄教授が〝考古学〟なのである。

教授

文学部　末永雅雄教授

新報社で語られる教授

〝考古学〟の末永武士道魂を基底に

〝関大の末永か、末永の関大か〟といっても過言ではない。考古学の末永といえば、石舞台の古墳や飛鳥旧跡、藤原旧跡などを指摘しその研究は学界でも注目を浴び定評のあるところ。一般には考古学なんて古くさいというイメージが強いが、教授いわく「物の学問だから骨董ぶるなるがそれを文化的に、科学的に掘り出し研究するのが考古学である」

陸軍大将になるのが夢だった。軍人のカッコイイ姿に憧れていた河内狭山の一人息子として末は医者か司法官かを嘱望されていたが、環境からの影響もあり興味をもった考古学が〝末永雅雄〟のライフワークとなる。

教授の先祖は応仁の乱を興した畠山氏であり二十代目にあたる。武士道の精神が至るところで首を出す。昨年最愛の妻を亡くされ首を落せを受けた時のこと、文部省から国指定跡の発掘調査の指揮を命ぜられたが、きっぱんと答える「自分がこれまで後輩の育成なく考古学に汚辱できたのも城を守ってくれる者がいたからこそだ。それに抵抗される者がなら地位も名誉もいらない」と感謝までつき添った。ともあれ末永先生を語るのに考古学と離すことはできない。

京大で研究生として二十年間（当時は自費の研究生が多かった）浜田耕作、西田直二郎先生の指導のもと、あらゆる角度から考古学の末永か、末永の関大か〟といっても過言ではない。考古学の末永といえば、石舞台の古

新執行部発足

学生の次元での運動困難か

去る五月十日、有隣館にて、新自治委員により、第一回自治委議会員出席（四十四名）のもとに開かれた。

議題は、本年度自治活動に先立って、次の三項目。

一、執行部役員選出

二、執行部役員選出

三、評議員選出

同委員会で選出された自治委員は次のとおりである。

自治委員会常任議長
（当）田村　功（経四）　33票
原　清三（法四）　11票

学友会執行委員長
（当）横畠正秀（商四）　33票
松下義弘（法二）　11票

同副執行委員長
（当）西田英明（法四）　18票
（当）林田嘉憲（商法四）　16票
喜多川進治（経二）　10票

同書記長
（当）西原一成（文二）
浜崎勝美（文四）

同総務部長
（当）浅田弘（文二）
藤井哲三（文二）

同経理部長
（当）小谷直行（法四）
〃　大沢美恵子（経三）

同渉外部長
（当）若林宣祐（商二）　35票

同組織部長
（当）伊藤寛（法一）　10票
伊賀興一（法一）　24票

同調査部長
（当）蔡原宏朗（文四）　33票
原　清三（法四）　10票

同厚生部長
（当）河田暁美（法三）　35票
藤井哲三（文二）　9票

同無任所執行委員（つ名）
（当）斎藤恒男（法三）　18票
吉田一美（文三）　6票

同組織部長
（当）伊藤寛（法一）　10票

同情報意伝部長
（当）田中俊夫（法一）　24票

同調査部長
（当）蔡原宏朗（文四）　33票
原　清三（法四）　10票

同厚生部長
（当）河田暁美（法三）　35票
藤井哲三（文二）　9票

同無任所執行委員（つ名）
（当）斎藤恒男（法三）　18票
吉田　稔（経三）　16票
喜多川進治（経二）　10票

評議員（二名）
松下義弘（法二）
吉田　昇（社一）
前田憲三（商一）
佐野　昇（経一）
岡本圭一（文一）

×　×　×

大学当局の経営主義により、より一層われわれの生活が侵害されている現時点において、熟行委員会が体育会八、文化会二、応援団二、弁論部一という構成のもとに行なわれようとしている。去年の闘えなかった社会学部における無能無策の発揮と学校当局の付属機関化を強め、その下で操作して、反対運動を抑圧させるという反学生的行為を反省、否定するというものでない。他方諸要求を勝ち取り、米日反動に反対しましょうとする民主主義を発展させる状況において貧困な天六学舎に放置され、創造的活動の行ない得ない状況、生活防衛さへ組織されていないといったわれわれの生活活動の多面的方向の課題を、団結して運動を起しえるといった学生の次元に帰らなければならない。

政府・理事会の「経済危機」

「国庫補助」

大学当局が私学の経営の危機を学生大衆に転化しようとする学費値上げの方向は学生大衆の生活をより危機化におくこと。そこに大学経営の生存がかかっている以上、容易な妥協はあり得ず、さらに国家＝大学当局の一体となった攻撃があり、大学の矛盾の集中的な噴火となっている。

現在進行している「私大の全般的危機」とは「国庫補助増額闘争」の特殊性、困難性が存在しているということを忘却しては、単純ではない。ここに私大の闘争が解決できる途上に達するほど資本＝財産は固定資本の蓄積が行なわれているのであり、借入金は返済すればよいのであって大学の資本そのものは何ら危機を現出してはいない。

過剰設備投資の基因は大学の経営規模拡大化である。それは大学志願者の急増と社会的要請である。日本資本主義の自立化政策により、「人材開発十ヵ年計画」の第十ヵ年目に、「学生増計画」は日本における「学校整備計画」の傾向と増長され、「教育投資論」にみられたように志願者数の急増に対して、経営を力点における私大の過当競争が過剰設備投資の基因である。特に私学は前述したように学生の経済負担を増大しながら学生を商品として〝安上り〟の学校運営としての機能を果している。

財政負担を学生に転化するということは学生大衆の収奪機関化体制内の要請に呼応する経営方針の誤りである。大学経営者の本来的な形態は、私大の健全な発展のために専門的におかれた大学の機能の分業体制のなかで理事会を位置付けられるのであるが、「産業協同」は大学機能を破壊し官僚化を決定的にうみだすものであり、当局との非妥協的な闘争が過去の現実にあるといえる。

関大経営体制が二部学生大衆から取って然るべきである。しかし他方理事会は「学費値上げ」を強行しつつ「国庫補助」を政府に上申座して要求するということだが、政府・理事会の大衆収奪の決定的な関係は何にも要向しえないのである。政府と大学理事会との対立が「経常収支に対する国庫補助」の争点となっている問題がみつけられるが、よしんば実現したところ、過剰設備投資し、大学志願者減少において何ら矛盾の解決の途を示しはしない。

まさしく私学は高額な学費を学生大衆に課せることによって成立し、切りつめられた生活に耐えながら「学問」をしようとしているわれわれ勤労学生にとって、大学経済の危機の解決として当局が提起する学費値上げの方向は、われわれの生活の経済的破綻化である。われわれ勤労学生の常識的問題意識は、われわれの生活の経済的破綻化を決定的にうみだすものであり、当局との非妥協的な闘争が過去の現実にあるといえる。

これは大学経営にとっては過剰設備の不補とはかくなるものであり、主体的な矛盾の現実であり、米日反動に反対しましょうとする民主主義の大学の存在意義を浮彫にしている。

これは大学経営にとっては過剰のプール資源として雇用しておけるという利点をもっている。教学の視点を欠いた関大経営としての存在の特殊性が序々に破壊され、資本主義体制の生産過程に組み込まれ大衆社会状況に大学の現実があるかぎりでかかる現実をとらえ取って然るべきである。しかし他方理事会は「学費値上げ」を強行しつつ「国庫補助」を政府に上申座して要求するということだが、政府・理事会の大衆収奪の決定的な関係は何にも要向しえないのである。政府と大学理事会との対立が「経常収支に対する国庫補助」の争点となっている問題がみつけられるが、よしんば実現したところ、過剰設備投資し、大学志願者減少において何ら矛盾の解決の途を示しはしない。

まさしく私学は高額な学費を学生大衆に課せることによって成立し、切りつめられた生活に耐えながら「学問」をしようとしているわれわれ勤労学生にとって、大学経済の危機の解決として当局が提起する学費値上げの方向は、われわれの生活の経済的破綻化である。われわれ勤労学生の常識的問題意識は、われわれの生活の経済的破綻化を決定的にうみだすものであり、当局との非妥協的な闘争が過去の現実にあるといえる。

これは大学経営にとっては過剰のプール資源として雇用しておけるという利点をもっている。教学の視点を欠いた関大経営としての存在の特殊性が序々に破壊され、資本主義体制の生産過程に組み込まれ大衆社会状況に大学の現実があるかぎりでかかる現実をとらえ

喪失した大学を鳥葬し共同体への創造へ

―「小試論」

関大二部が直面している諸矛盾は、大学当局の経営主義的のもとにマスプロ教育、学費値上げ、千里山移転の動向、教学・厚生施設の貧困などがあげられるようがさらに重視せざるを得ないのは二部が〝経営難〟に落しこめられ、二部の勤労学生の〝場〟としての喪失といった動向である。かかる自己の生活とその存続する〝場〟―環境との関連に対する有機的関係を対象化して展開するといったことのない状況である。

これは理事会・学友会の協定という形態をとり、四十年度から勤労学生の便宜を計るという美名でもって二部の入試期日を一部より遅らせたことにより、「一部を失敗して、三年次で一部へ編入すべく二部に、入学する学生がでてきたことである。

これは大学経営にとっては過剰増殖、編入生の二定数の増加傾向は関大経営側面によりの二定数のプール資源として雇用しておけるという利点をもっている。教学の視点を欠いた関大経営としての存在の特殊性が序々に破壊され、資本主義体制の生産過程に組み込まれ大衆社会状況に大学の現実があるかぎりでかかる現実をとらえ

「社会の要請」―学園の混迷

現時点における己資本主義、あるいは社会状況の中で現在の関西大学との関り合い直面している「大学の非大学」「大学の大衆化」「産学協同」の方向は、現在、機械による自動化装置全体を操作する人間の労働は、従来の機械化の方向とはちがって、労働における知的労働の役割が決定的となっている。このように全面的機械化とオートメーション化は加工機械化から、企画管理の準備機能分野まで包括する方向にある。即ち事務の工場化といえる。この企画・管理部門・経理部門を含むコンピューター（電子計算機）使用とともにそれは一般従事に移従するものとなり、「新しい知識と技術を身につけた者」の登場を〝ブルジョアジー〟は要求している。

ところが科学・技術革新の担い手なるテクノロジーはこのままでいくと数年後には数十万の不足が推算されている。これは帝国主義に突入した現在の日本資本主義にとって研究体制の革新と科学技術教育の推進による「人的能力の開発」「養成」は死活の課題があっている。つまり国家による統一的な科学技術政策が緊急となって展開されているわけである。かかる状況下に、新しい科学技術の生産関係に適応するような人間と人間関係を要請している。そこに科学技術教育の振興の一方「技術革新に適応する人間」―「期待される人間像・家庭像」「道徳教育」の振興として国粋的な内容が現われているわけである。

一般教養科目の縮小化、外国語専門科目の拡大化の内容をもって人文系でなく「管理経営」「商業部門」が「社会、産業界の要請」として社会学部、教育学科が新設された。このように関大が即物的に社会の要請に答え技術的な教育体制へと時を進め、体制内教育へ、大学を没主体的な形態へ、移行している。それが高度成長の終焉の状況下、大学の財源確保の手段の拡大化と位置付られる傾向性を濃厚にしている。

さらに大学は、帝国主義的支配体制として、大学の自治の形骸化の方向と「大憲法」「教免法」改悪、外国人学校制度案と、体制内下の教育内容の「産学協同」の方向に、人何をなすべきか〟という問題意識を明確にして対処することなく〝大学の大衆化〟一貫の空洞化―を押し進め呼応している。

大学は財政負担を全面的に学生へ転化し、大学の膨張、大量の学生を入学させ、資金を拡大し設備を拡大し、学生を増加させるという悪循環をラセン運動的に拡大しているように大学の経営的傾向、「産学協同」という形態を学問が、とり、従順な中堅労働者、実用的な知識を身につけた大衆の大学卒のサラリーマン、技術者、労働者、マスプロ教育による粗雑な教育内容のもとに、学生を一商の商品として、体制を形式的に否定するのでなく主体的に否定しのりこえるといった内容の作業の過程で〝大学の非大学〟に対する抵抗として、大学の〝場〟の可能を追求し、学生の自己確証の認識への営みを必要としている。

それは、いままでのべた私学の危機的内容、私学の財政負担を全面的に学生に要請し、学生商品化の大量生産工場化―大学の非大学への転化を高度成長を追求し拡大化した私学が、高度成長の終焉とともに矛盾の集中化となる。

体制内教育と、「産学協同」は大学の自治と学問と自由を空洞化させる。他方文部官僚体制による学生組織の全面的規制・破壊である。

大学の大衆化に、学生は〝物〟と把え、そこに盛識の分解、質の空洞化、学生の特殊性の役割の喪失を肌に感じる一方、国家独占の学生大衆収奪の強化と生活の危機に身をさらしている。

現在、機械による自動化装置全体を操作する人間の労働は、従来の機械化の方向とはちがって、労働における知的労働の役割が決定的となっている。このように全面的機械化とオートメーション化は加工機械化から、企画管理の準備機能分野まで包括する方向にある。即ち事務の工場化といえる。この企画・管理部門・経理部門を含むコンピューター（電子計算機）使用とともにそれは一般従事に移従するものとなり、「新しい知識と技術を身につけた者」の登場を〝ブルジョアジー〟は要求している。

ところが科学・技術革新の担い手なるテクノロジーはこのままで

度として保証するための政治的法的な総括形態であり、そのことめにする形態である。さらに市民社会が自己疎外の社会形態であること）

「社会の要請」―学園の混迷

現時点における己資本主義、あるいは社会状況の中で現在の関西大学との関り合い直面している「大学の非大学」「大学の大衆化」「産学協同」という形態の方向は、現在、機械による自動化装置全体を操作する人間の労働は、従来の機械化の方向とはちがって、労働における知的労働の役割が決定的となっている。このように全面的機械化とオートメーション化は加工機械化から、企画管理の準備機能分野まで包括する方向にある。即ち事務の工場化といえる。この企画・管理部門・経理部門を含むコンピューター（電子計算機）使用とともにそれは一般従事に移従するものとなり、「新しい知識と技術を身につけた者」の登場を〝ブルジョアジー〟は要求している。

ところが科学・技術革新の担い手なるテクノロジーはこのままで

主体的活動への認識を

学費の過剰増37、39年の高額な値上げは学生生活へ激しく圧迫をかけている。こうした状況において、学生を縛りつけ「心に日の丸を」「企業にはいってすぐ使える」という日経連の主張、「期待される人間像」にみられる社会秩序に最も長く順応する人間を大量の商品化された学生が社会に送り出されているという大学の大衆化といった現実こそ大学が歴史に対しての負うべき役割・存在を証明した現実こそ大学の情況に他ならない。

かかる学の空洞化の状況―〝物〟として把えられる「今日」によって―単に関大だけの問題でなく全国的な状況で進行しているこの内容を持ち、主体的な運動としてとりくまなければならない。

かかるように学生の利益が徹底的に侵されている情況にあって学生の利益を擁護すべき学友会はパート抗争の場と化している不実は自治の運営を放棄するものではない。課外活動を防衛するため有利な位置をしめるため体育会の利益拡大を目指し、組織動員の下に学友会の主流を形成するに至った。

宏保以降の急激な反動化のなか六一年以降徹底的な大学当局の反動化作斧と保守的右翼的勢力の急拾頭のなか、学生運動は強力に圧縮され、学生大衆の権利と生活権を侵害させ、大学当局の経営の好餌化されている。

こういった下手算獲得としての一年以降徹底的な大学当局の反動化作斧と保守的右翼的勢力の急拾頭のなか、学生運動は強力に圧縮され、学生大衆の権利と生活権を侵害させ、大学当局の経営の好餌化されている。

こういった下手算獲得としてのパート抗争は、報道・言論機関としての新報社への徹底的な手算大行為にみられるように、クラブ活動の破壊が露骨にあらわれており、現実に引き起こされる混乱において「自治」たる存在意義は埋没せざるを得ない。

大学の管理機構は、有隣館の大学当局の管理をはじめ、学生の自治会活動やサークル活動への規制が強まり〝創造的〟〝生産的〟場が崩壊化している。

かかる情況において、クラブの提唱する「大同団結」と大学当局から「救助金」増額を要求することはつなげる。確かに現実において同意を得るとともに、関大における学生のサークル活動の中心的立場を占める学術研究会、文化会体育会は、〝創造的〟〝生産的〟活動へ具体的に活動を起こすことにより、現実の〝場〟の喪失の危機感を克服していく現実的内容を持つであろう。

歴史に対して大学のその主体的な活動とその役割の関連には前述した現実において、〝場〟の主体の喪失なく、その〈存在〉を模索し、変革の追究の〝場〟を創っていかねばならないということが、埋没され、矛盾の現象が集中し〝危機〟の実感を与えている。だから「大

自己にまかせ」と共に影響を受けた思になるのです。こう書いてくると、夫婦の理想像とはかくなるものですと、いうようですが。

違うのです。あくまで「妻二人」は、男の生き方の物語です。だから、私が「おれは道子といって行かなければならない」を生きた語としてきくことができたのです。やはり、人間として生きるため、自分を変革していかなければならない、そして自分をここまで変えた、道子という女、道子という天使と、おれはつらくても生きていかなければならない、という現代映画でした。

女の理想像は「歴史天使のことさらからかで、夜は娼婦のごとくなまめかし」であるけれども、二つとも完璧した女性というのは、そうあるものではないので、選択の必要にせまられる。そうして、先程いったなまめかしさ女性を振り切り天使を選ぶことになる訳だのだが、何故か？

そうか、それが男というものか。そうすると男というものは、たえず、たえず自分をたたかわせなければならないが、女は生まれつきの宿命のようなものに安定は、映画はどかっこよくない。

だけど本当はその程度なのだ。結局「道子、おまえはおれの目覚ましてくれた。ありがとう」という増村フェミニズム作品でした。

〔ザトウ（おさむらい）〕

映評

おれは天使と生きて行かなければならない

―「妻二人」増村保造監督―

それほど感動的でもなく、衝撃的でもない映画。それは、中程、道子（若尾文子）が醜子（岡田茉莉子）の恋人小林を、身を防るため、ピストルでうつシーンなど、いくら緊迫感があるけれども、となりのおっちゃんが言ってたような「なんや、スカみたい」になりかねなかった。しかし最後、娼婦のごとくなまめかしい醜子を得に「おれは道子と生きていかなければならない」といい切った男、葛藤葬論。元文学青年、百五十万部発行の雑誌、「主婦の世界」の前業務部長さま氏業中は、贈答の賄賂をそれでも、まえかがみになって上っていった。それは一番最初のシーンの台詞「つかれたなあ」と対応していた。

妻道子の父（三島雅夫）の経営する「主婦の世界」のスローガンは「清く・明るく・美しく」それは道子の主張である。そして、その幻想がくずれおるのを感ずるとき、そこには、天使道子によって、清められ、正しく、正直に生きることを決心した夫がおるわけなのです。そして、正しく生きることは、美しく生きることは、そんなに無駄なことでも、浮かれたことでもないことに気ずくのです。道子は、完全な女性というように、みんなにいわれます。夫も二人無論、清く明るく美しく妻をみならいます。そして最後には「あなたって、正直な方ね、私うな「なんや、スカみたい」になりかねなかった。しかし最後、娼婦のごとくなまめかしい醜子を得に「おれは道子と生きていかなければならない」といい切った男、葛藤葬論。元文学青年、百五十万部発行の雑誌、「主婦の世界」の前業務部長さま氏業中は、贈答の賄賂をそれでも、まえかがみになって上っていった。それは一番最初のシーンの台詞「つかれたなあ」と対応していた。

妻道子の父（三島雅夫）の経営する「主婦の世界」のスローガンは「清く・明るく・美しく」それは道子の主張である。そして、その幻想がくずれおるのを感ずるとき、そこには、天使道子によって、清められ、正しく、正直に生きることを決心した夫がおるわけなのです。そして、正しく生きることは、美しく生きることは、そんなに無駄なことでも、浮かれたことでもないことに気ずくのです。道子は、完全な女性というように、みんなにいわれます。夫も二人無論、清く明るく美しく妻をみならいます。そして最後には「あなたって、正直な方ね、私

国家公務員採用上級 甲種 乙種 試験

受付　5月22日（月）まで

受験資格

○昭和19．4．2（2種は昭13．4．2）～昭和21．4．1生
○昭和40．3以降大学の学部卒・昭和43．3卒見
○昭和40．3以降大学専攻科、大学院修了・在学

試験地　大阪市・京都市

人事院近畿事務局　（TEL（941）―2121）

オトコがえらぶ！　オトコが決める！　ナイスタイプ整髪料

丹頂マイコーム〈スペシャル〉

●ミクロ乳化整髪料
●100g 300円　●60g 200円

❶ベタテカしないでバラつかない
❷ドライヤー効果をフル発揮
❸ハンディなポリ・チューブ入り
❹毛の質に関係なし
❺洗髪は1回で完了
❻男らしい香り

新発売

丹頂株式会社